

学部

2019 年度
「卒業生満足度調査結果の検討」

大学院

2019 年度
「修了生満足度調査結果の検討」

大阪電気通信大学

教育開発推進センター

Center for Educational Development (CED)

目次

学部

2019 年度 「卒業生満足度調査結果の検討」

工学部		
電気電子工学科	4
電子機械工学科	7
機械工学科	8
基礎理工学科	10
環境科学科	12
情報通信工学部		
情報工学科	16
通信工学科	19
金融経済学部		
資産運用学科	21
医療福祉工学部		
医療福祉工学科	22
理学療法学科	25
健康スポーツ科学科	26
総合情報学部		
デジタルアート・アニメーション学科	28
デジタルゲーム学科	29
情報学科	31
共通教育機構		
人間科学教育研究センター	34
英語教育研究センター	36
数理科学教育研究センター	38

大学院

2019 年度 「修了生満足度調査結果の検討」

大学院	工学研究科		
	先端理工学専攻	41
	電子通信工学専攻	42
	制御機械工学専攻	43
	情報工学専攻	44
大学院	総合情報学研究科		
	デジタルアート・アニメーション学専攻	45
	デジタルゲーム学専攻	46
	コンピュータサイエンス専攻	47
大学院	医療福祉工学研究科		
	医療福祉工学学専攻	48

学部

2019 年度

「卒業生満足度調査結果の検討」

2019 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2020 年 5 月 22 日

工学部 電気電子工学科

2019 年度主任 中瀬泰伸

[A]本学での大学生活をとおして、あなたは次のような知識や能力などをどの程度獲得したと思いますか？
について。

昨年度の電気電子工学科および今年度の工学部の結果と傾向がほぼ同じである。両者とも「国際的な視野」について、他の項目より平均点が低いのが目立つ。しかし日頃学生との接触からは、本件に関する不満は特に聞こえてこない。自由記述[E]においても、関係する意見は下記のわずか 1 件のみである。

・英語にふれられる環境などをもっと作ればよいと思う。

「国際的」という言葉に学生がどのようなイメージを持っているのか不明だが、英語によるコミュニケーション能力は多くの企業で求められている。本学科独自に行った卒業生へのアンケートでも、在学期間にもっと英語を勉強すればよかったという意見が多い。その対策も兼ねて今年度から英語科目以外にも、英語に触れる機会を増やす予定である。

[B]本学での生活を振り返り、以下の授業科目群や教育設備・機器などについて、全体的に評価してください。について。

「総合科目(英語科目)」の平均点は工学部のそれとほぼ同じであるが、低評価をした人数が多い。本学科では英語アレルギーの学生が多かった印象があるが、それと一致している。単位取得のための英語ではなく、上記[A]の欄でも述べたようにプレゼミナールなどを活用して技術英語に触れる機会を作りたい。

「卒業研究やゼミにおける指導」の平均点が高い。これは、後に述べるように本学科教員の面倒見の良さが反映された結果である。

自由記述

[D] あなたが本学で良かったと思う点を書いてください。

1.特定の分野に限定することなく、電気電子の分野全体をまんべんなく学習する方針を取っている。それを好意的に評価する学生が多い。今後もこの方針を変えない。

- ・専門的な分野を幅広く学べた。
- ・幅広い専門分野を学ぶことができた
- ・分野ごとの専門科目を広く深く学ぶことができた点
- ・専門的な知識が身に付いた。
- ・専門分野に詳しくなった。
- ・専門の教員がおりさまざまな勉強ができた。

・教授に多くの専門的なことを教えてもらえる。

2.教員が学生の理解度に合わせて親身に個別対応する面倒見の良さが評価された。さまざまな困難を持つ学生の情報は学科内で共有することで、それぞれの事情を理解した上で指導している。

・教授が親身で、色々な事に挑戦させていただく事もできてよかったです。本大学だからこそできた経験が多くあったと思います。

・わかりやすく指導をしてくださる教員がおり、勉学に対してネガティブになっている人たちを助けたいと思うきっかけになった。

・教員の人柄に助けられた。友人などもたくさんできて、楽しいキャンパスライフを送ることができた。

・先生方のご指導がすごく丁寧で良かったです。

・困難は多かったが、素晴らしい教授に出会えた。

・専門分野の内容がわかりやすく丁寧に指導して下さったおかげで、最後まで授業についていくことができた

・卒業研究の指導を適切にいただき就職活動もしやすい環境だった。

・専門の教員から適切な指導をいただけた。また、教員も話しやすく、さまざまな知識を得ることができました。

・困難な壁にぶつかっても親身になってくれる教員や友人が手助けしてくれた。協調性の大切さを学んだ。

[E] あなたが本学で改善すべきと思う点を書いてください。

1.情報伝達に不満が多い。その多くは、2年前に台風・大雨・地震災害が相次ぎ、休講および代講の通知が錯綜したことが原因と思われる。また、新棟工事により掲示板が縮小された一方で、メール等による連絡が多くなり、学生に対して一貫した情報伝達経路が周知できていなかった。今年度からは伝達ルールも明確化されたので大幅に改善される。

・重要な告知をしっかりと伝達してほしかった。

・やや情報に伝達不足なところがある点

・災害時の休校情報伝達

・休講の連絡が遅い。

・運動系のクラブの試合日程が学内にはり出されていないため試合があることが分からない

・教授の都合に合わせるのは良いが、前々から伝えること、押し付けは良くないと思った。掲示板に紙を貼るのが遅いと思った。

・上の例にある通り、情報伝達の方法が不十分だと思う。もう少しメール等を活用して欲しい。

・情報伝達の方法が不十分で、重要な告知をしっかりと伝達できる仕組みを検討いただきたい

2.学生の学力レベルの差が大きく、できる学生とそうでない学生との間で相反する要求もある。できる学生への対応が課題である。

- ・学生が勉強したいと思えるような環境が整ってなかった。
- ・もう少し厳しく授業などの指導をするべきだと思う。
- ・TAの選び方が適切ではないため質問に答えられない時があった。
- ・授業での内容が重複することがあった。
- ・講義の内容が質問して理解していないのにどんどん進んでいってしまう
- ・知識の定着をうながすため、課題をもっと出すべきだと思いました。

[F] あなたにとってとくに役に立った。あるいは印象に残っている科目名と、どういう教育内容が役に立ちましたか。

1.高評価の科目には合格が難しい科目も多数含まれている。各先生の忍耐強い指導により、自分で努力して理解できた、わかったという経験が好印象につながったと思われる。

- ・電気数学(小見山):厳しかったが、自分でやる習慣がついた。
- ・制御工学(伊藤先生):本当に一番勉強して自分の力になった。
- ・電気回路(小見山):一人一人の対応が丁寧で分かりやすかったと思います。
- ・電磁機学(松浦):毎週テストがあつてよかった。
- ・卒業研究(伊藤先生):自分で調べて考える力がついた。
- ・電気電子創成工学:自分からすすんで物をつくる姿せいがみについた
- ・ハードウェア設計演習(日高):マニュアルではなく、自身で考える力を身に付けることが出来た。
- ・半導体(松浦):頑張ればとれる

2.実験科目の評価が高い。電気は実態がないため、理解が難しい。本学科では、さまざまな実験を準備して、電気の存在を体感してもらう工夫をしている。それが評価された。

- ・実験(伊与田):実践的であった。
- ・実験(伊与田):工学部らしかった。
- ・電気電子工学実験(E学科教員)もし、2回受けることがあつてもしっかりやりきって欲しい

[G] あなたの現在の感想も含めて、大阪電気通信大学への要望や提案などを自由に記してください。

他学年の学生との交流を望む声が相変わらずある。1年生の合宿へのスタッフとしての参加、内定者による就活アドバイスなど下級生/上級生との交流の機会を多数用意している。また、サークル活動へも勧誘している。積極的に活用して欲しい。

- ・学年をこえる関わりが欲しい
- ・学年上下間の交流が少ないので、もっと増やしてほしいと感じた。

以上

2019 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2020 年 5月 27日

工学部 電子機械工学科

2019 年度主任 月間 満

1. 総合評価

2019 年度卒業生のうち 71 名からの回答が得られ、総合評価は 10 段階中 7.5 とまずまずの結果であった。また、2018 年度の総合評価 7.2 と比較して 0.3 ポイント上昇した点は評価できると考える。

2. 個別の自由記述欄にて評価の高かった点

自由記述欄で評価の高かった内容を、多い順に以下に抽出した。最も多かったのは、研究室における研究活動や研究室内での交流であった。2019 年度の3年生から、プレゼミ生の研究室配属時期を9月から6月に前倒した。今後も、更に満足度を高めるべく研究室活動を推進していきたい。

1. 研究室での活動(研究室内での交流や教員による指導を含む)
2. 研究設備の充実度
3. 自由工房, K号館, 3D造形センター
4. 教員の専門分野の広がりや教育
5. 学科内での友人との交流
6. 実験や製図などの実習系授業への評価

3. 個別の自由記述欄にて改善を要望された点

圧倒的に多かった要望は、大学からの情報連絡の遅さであった。2019 年度は、特に、台風などの大規模な自然災害の発生があり、授業の中止等の重要な連絡が遅いと感じる学生が多かったようである。2020 年度からは、学科 SNS を導入しており、よりスピーディな情報連絡、透明性の高い情報共有を図っていくことが、学生の安心感や大学への信頼につながるものと考えている。

またシラバスの記載内容について、内容が正確でない場合があるとの指摘が 2 件あった。2020 年からのカリキュラム改定に伴い、しばらく様子を見ていきたい。その他は、単発の指摘であり、全ての情報を学科の教員間で共有した。

2019 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2020 年 5月 22日

工学部 機械工学科

2019 年度主任 山本 剛宏

[A] 学生が獲得した知識・能力に関する項目について

学生が獲得した知識・能力に関する項目では、全体的に昨年度に比べてポイントが上昇している点は評価できる。しかし、「国際的な視野」の項目は、ここ数年と同じく他の評価項目に比べて低いポイントが続いている。この傾向は機械工学科だけでなく、工学部全体でも同様である。これは、本学には留学生が少なく、外国人との交流がほとんどないことが学生の評価に現れていると考えられる。この問題は学科単独で解決できる問題ではなく、大学全体で議論すべき問題である。一方で、学科の評価ポイントは昨年度に比べ各項目で 0.2~0.3 ポイントと比較的大きな上昇が見られることから、例えば、学生が国際的な研究成果に触れる機会を増やすなど、学科として取り組めることを進めることで解決していく方法はありと考える。

また、「専門的な知識・技能」・「考えていることを図解などで表現できる力」・「他人と協調して物事に取り組む力」の項目は 3.9 ポイントと高い値になっている。これは、講義・実習・卒業研究を通じて学生の社会人基礎力の獲得を目指す学科教員の取り組みが成果として現れたものと考えられる。特に、自由記述において、本学でよかったと思う点として卒業研究の際の指導を挙げているものが昨年度よりも多く見られており、卒業研究を通じた経験がこれらの項目の高いポイントにつながっているものと考えられる。

「リーダーシップ」については 3.4 ポイントとやや低めの数値にとどまっている。コミュニケーション能力の中で、協調性に代表されるメンバーシップの獲得については教育成果が表れているが、リーダーシップの獲得に向けた指導についても指導方法を検討していく必要があると考えられる。

[B] 授業科目群、教育設備・機器に関する項目について

授業についての評価を見ると、「英語科目以外の外国語科目」以外では比較的高いポイントになっており全体的には評価できる。「卒業研究やゼミにおける指導」は昨年度に続き高いポイントを維持している。特に、昨年度の結果では「やや悪かった」および「悪かった」の評価をつけた学生が約 9%と多かったものが、約 6%に減り、昨年度に改善すべきとした課題点において改善が見られた。[A]の項目で述べたように、自由記述において、卒業研究での指導内容を評価する回答が多く見られたことから、卒業研究指導における学科教員の取り組みが結果として表れたものとする。

また、自由記述において TA の指導を評価する内容のものも多数あり、TA の学部教育への貢献が基礎専門科目・専門科目の高評価の一因になっていると考えられる。成績上位層の学生には、SA の経験を通じて大学への主体的な関わりの意識を持たせ、向上心の持続を促すことは、自身の卒業研究への取り組み方への好影響や TA・SA による教育効果の向上につながるのではないかと考える。

総合評価について

総合評価は昨年度の 7.0 に対して今年度は 7.1 と 0.1 ポイント上昇している。微増ではあるが、一昨年度に続き 3 年連続でのポイント上昇であり評価できる。しかし、工学部平均よりは低いポイントにとどまっているため、引き続き、教員個人および学科全体で、評価結果と自由記述の内容を検討し教育への取り組みの改善を図り、今回評価の高かった専門力の獲得や卒業研究指導について高いレベルを維持しながら、総合評価の上昇に務めていきたい。

2019 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2020 年 5 月 28 日

工学部 基礎理工学科

2019 年度主任 影島 賢巳

1. 満足度の数値的側面について

知識や能力の獲得度に関する設問[A]への回答の平均は、ほとんどの項目で3点を上回っており、まずまずの水準である。しかし、その中で項目8「国際的な視野」は、その中の小項目 3 つ全てで2点台となっており、国際的な視野を養う教育が不足していると学生が考えていることがわかる。これは、次の設問[B]で留学制度に対する満足度が低いこととも関連すると思われる、自由記述の設問[E]にも留学制度への不満がうかがわれるコメントがある。卒業研究などの活動では、海外の研究グループとの協調や競争などが日常的に行われ、今後も継続・発展すると思われるが、それ以外に、低学年次の講義などの中でも国際的な視野を養うような内容を取り入れるべきだと考えられる。留学制度の充実については、全学的な対処も必要な課題である。

授業科目群、教育設備・機器などに関する設問[B]への回答の平均は、すべての項目で3点を上回り、中でも「卒業研究やゼミにおける指導」は4点を上回る高い点数である。卒業研究やゼミの充実ぶりは、自由記述の設問[D][F]のいくつかのコメントからも伺われ、教員が熱心に卒業研究指導を行い、それが学生の満足度にも反映されていることがわかる。

総合評価に関する設問[C]の総合評価は 7.2 と、昨年度よりわずかだが増加している。

2. 自由記述の内容について

自由記述の内容には、当学科の課題とすべき点が明確に現れていると考えられる。具体的には、授業のレベルが低いことや、カバーする専門分野の狭さに対する不満を表明するものである。

授業のレベルは、ここ数年の学生の学力の上下差が大きいことから致し方ない面もある。しかし、高学力もしくは学習意欲の高い学生の高度な要求に答えられる教育の方法を考える必要性は、本学全体の入学生のレベルが向上しつつある現在、さらに増すであろうと考える。これは、学業へのモチベーションの維持を通じて、離学者の低減にも重要であると考えている。また、教育の範囲が狭いという指摘に対しては、学生にとって必要である領域をカバーできる広い視野で各教員が教育に臨むことは不可欠であろう。以上の点を踏まえて、新カリキュラムでスタートするアクティブサイエンスゼミナールなどの新科目について、分野横断的・融合的教育という新たな方針を重視し、科目運営の具体的な詳細を定めていくとともに、学生と教員とのより密接なコミュニケーションによって、意欲の高い学生に対してより高度な刺激を与えられるようにすることも必要である。

その一方で、授業についていけない学生への対応に関する不満とみられるコメントもある。上で述べたような授業のレベルアップを図る際には、サポートが必要な学生へのフォローアップもより重要になるので、そのためにも、学生－教員間のコミュニケーションをより意識する必要がある。

当学科は理科・数学の中学・高校の教職課程を置いている。教職に関するコメントを見ると、設問[E]や設問[G]の中で、教職課程のレベルを上げて欲しいとのコメントが複数あることは重要である。教職課程の運営は学科単独の問題ではないうえに、実際の教育では非常勤講師に頼るところもあるので、学科の意思を

教育レベルに反映させるのが他科目に比べてやや困難な面がある。しかし、当学科における教職課程の維持と、教員就職率の向上のためには、教職教育のレベルアップは不可欠なので、関係各部署と問題認識を共有して連携して対処するようにしたい。

3. 総合的に見て

卒業生の満足度は総体的に見て低いわけではないが、昨年度の値と比べて有意に向上しているとも言えない。また、自由記述のコメントには、当学科の教育の現状における問題点を具体的に感じさせる内容があるので、今後の新カリキュラムや学科の運営に反映させるべきであると考えている。

2019 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2020 年5月28 日

工学部 環境科学科

2019 年度主任 齊藤 安貴子

1. はじめに

環境科学科の 2019 年度卒業生満足度調査結果について、学科会議などで検討した。ここでは、その結果の概要と検討内容、満足度向上のための対策について報告する。

2. 環境科学科の調査結果の概要

2019 年度の環境科学科、工学部全体、大学全体、及び、環境科学科 2018、2017 年度のそれぞれの獲得数値の合計を表 1 にまとめた。総合評価は 2018 年度同様高い水準を保っていたが、さらにすべての項目にて数値が向上した。特に総合評価は大幅に向上した。

表 1. 獲得数値の合計のまとめ

	U (2019)	工学部 (2019)	全体 (2019)	U (2018)	U (2017)
[A] 知識・能力の獲得	3.7	3.5	3.5	3.4	3.5
[B] 授業科目群や教育設備・機器など	3.9	3.7	3.6	3.6	3.6
[C] 総合評価	7.9	7.4	7.3	7.2	7.2

[A] 知識・能力の獲得

知識・能力の獲得について、2018 年度と比較してすべての項目で向上した。幅広い分野にわたる教養と専門的な知識・技能 (1, 2) いずれも、2018 年度の 3.7 ポイントから 3.9、4.0 ポイントと大きく向上している。U 学科では新カリキュラムに向けて授業内容を順次見直してきており、その効果が出てきたものと考えている。また、論理的思考力や判断力など (3~5) も 2018 年度の 3.6~3.7 ポイントから 3.8~4.0 ポイントと大幅に向上している。昨年度低下して改善が必要であった困難に対する対処力 (7) も 3.5 から 3.8 まで向上し、学生のレベルに合わせた教育 (負荷) を与えそれを克服させる教育ができたものと考えている。昨年度から導入された「考えていることを図解などで表現できる力」については、比較的高い値 3.8 ポイントであり、学生実験のレポート作成が効果を上げていることが示唆されている。実際に、自由記述の部分でも学生実験のレポート作成が成長に役立ったと感じているというコメントがある。

しかしながら、昨年度までと同様国際的な視野 (8) は 2.9~3.3 ポイントと、他の項目と比較すると相対的に低い。学生たちの話を聞いたところ、社会のグローバル化に敏感であり、もっと国際的な視野を獲得したいという気持ちの表れであることが示唆された。また、コミュニケーション能力 (9) も 3.8 ポイントと昨年度から 0.3 ポイント向上した。リーダーシップ (10) は他と比較して 3.4 ポイントと低い値を保っているが、社会人材の中でもリーダーシップは重要な力であるため、今後教育方法などを検討

していく必要があると考えている。協調力(11)も3.7から4.0まで向上した。新規の「新しい課題を発掘する創造力」は3.8ポイントと高い値を示した。この項目については今年度の推移をみて検討したい。

工学部平均、大学全体平均ともに、2018年度の3.5ポイントと同様2019年度も3.5ポイントであったことから、環境科学科が特に満足度が上がっている傾向にあることが分かった。

[B] 授業科目群や教育設備・機器など

授業科目群や教育設備・機器なども、2019年度は全体的に大幅に向上した。これまでと同様、授業科目群が高いポイントを示している項目は、基礎専門科目・専門科目(実験・実習・演習など)(5)と卒業研究やゼミにおける指導(6)である。丁寧な指導を心がけており、各教員の努力が報われたと考えている。これまで低い傾向があった総合科目についても大幅にポイントが向上しており、総合科目の先生方の努力が成果となって出てきている。図書館、パソコンなどのIT、講義室、実験室などの設備(8~13)も評価が大きく向上している。TAによる指導(14)も大きくポイントが上がり向上し、3.4から4.0ポイントになっている。これはTAの質・レベルが向上したことに加え、実験科目・演習科目の内容の見直しなどが実を結んだと考えている。シラバスや事務サービスおよび留学制度(15~18)についても、前年度よりもポイントが向上した。昨年度見られた一部の設備・事務対応に対する不満が、今年度の自由記述コメントにみられないことから、事務系職員の努力、および、学科教員との連携がうまく機能し始めたためだと考えている。特に就職課の事務サービスのポイントが0.5ポイント向上していることから、就職課の丁寧な対応が学生の就職活動に対するフォローがにとって重要だったのだと考えられる。全体のポイント向上傾向から考えると、大学祭等の行事(19)は3.3ポイントで前年度の3.1ポイントよりも0.1ポイントの向上にとどまっている。

合計は3.9ポイントで、昨年度から0.3ポイント向上した。工学部3.7(2018年度3.6)、大学全体3.6(2018年度3.6)から考えると、この項目についても環境科学科の学生の満足度は高い。

[C] 総合評価

総合評価は7.9ポイントであり、昨年度の7.2ポイントから大きく向上した。これらは工学部の7.4(2018年度7.1)ポイント、大学全体7.3(2018年度7.1)ポイントより大幅に高い。昨年度も大学全体、工学部よりもやや高い満足度を示していたが、昨年度ポイント向上は大きな変化だと考えられる。自由記述欄から、卒論・研究室での教育二関する満足度が高いことがうかがえる。特に卒業研究・研究室に対する好意的なコメントが目立っていることから、各教員の丁寧な指導が高いポイントの要因となっていると考えている。

一方で大幅な点数の向上は、満足度評価のアンケートの取り方を例年と変えたことも要因の一つである可能性があるため、今後の推移を注視していきたい。新型コロナの影響で、例年は立食パーティー会場でアンケートを記載していたが、昨年度は教室でじっくりと時間をかけて記載している。学生自身が例年よりもよく考えて記載した可能性がある。

3. 満足度維持・向上のための対策

現在、以下の3点について対策を検討している。

3.1. 新カリキュラム・内容の定着

今回前述のように、全体的に大幅にポイントが向上した。この数値を保ち、かつ、さらに向上させるため、2020年度から開始した新カリキュラムを中心に、新カリキュラムの学年だけではなく、そのほかの学年の専門科目の授業内容について、より魅力的で学生の将来の目標が明確になるような内容の検討を行っている。特に、「食品衛生」、「住環境設計」を新しい柱として周知を勧めている^[1]。食品衛生に関しては、2019年5月に食品衛生管理者および食品衛生監視員の養成施設として認定され、学生の将来が見える・将来に役立つ・卒業時に資格が得られるカリキュラムが進行中である。

3.2. リーダーシップの養成

昨年度からリーダーシップ(10)を養成するための施策を進め検討を行っている。

具体的には、5月初旬の学外研修でのリーダー創出、および、初年次教育として申請した1年生前期の実験科目である「生活化学実験」でのSA活用によるリーダー創出検討を行う予定であったが、新型コロナウイルスの影響で、学外研修は中止となり、また、生活化学実験も遠隔授業で行っているため、現時点で実施できていない。

今後、対面授業の開始状況を鑑みながら再検討していく予定である。

実際に行う予定だった内容を以下に示す。

<グループワークにおける新しい試み(案)^{[2][3][4]}>

新入生には友達を作ることが苦手な学生がいる一方で、逆にコミュニケーション能力に秀で、面倒見のよい学生もいる。そこで、環境科学科で毎年行っている1年生の合宿研修や実験科目等でグループワークを実施する場合に、そのグループのリーダーを決め、そのリーダーが自然とグループワークを主導するような形を作った。これによって、友達がいらないなどの理由からレポートが書けない学生もフォローされるように促せ、理学者対策にもなると考えた。

1年生の学生実験科目である生活化学実験にて、実験科目班のリーダーを決める。上記グループのリーダーと変えたのは、実験が上手い・得意な学生がより成長できるよう「実験科目に関しては自信がある」学生も伸ばすためである。実際に、実験のTAの補助的な役割をしながら協力して実験を行う姿が目につく。また、例年よりも学生同士の助け合いが顕著であると考えている。こちらに関しては、まだ授業期間中であるが効果は出ていると考えている。この施策を高学年、および、他の科目にも広げることで、リーダーシップをとれる学生を増やしていき、学生が実感できるところまで進めていきたい。

3.3. プロジェクト等の活性化^[1,5]

大学祭等の行事(19)のポイントが比較的低く、昨年よりは改善したものの以前低い状況である。当学科では、「ベリーベリープロジェクト」、「カフェラボプロジェクト」、「電池プロジェクト」などのプロジェクト型教育を推進する一方で、「地域連携プロジェクト/ボランティア入門」等の総合科目(キャリア

形成群)を通じて、大学祭等と同様なイベントに関わることができるように積極的に働いている。引き続き、このような活動を活性化させるように努力する。

参考資料

[1]中田亮生・齊藤安貴子:環境科学科の取り組み事例紹介、2017年12月20日、全学教授会にて発表(本学四条畷キャンパス)。

[2]2019年度+学外教育研修プログラム実施報告書(U学科)、2019年6月10日学事課に提出(非公開資料)

[3]中田亮生:環境科学科の離学者に関する検討と対策、2018年7月9日付で学生課に提出(非公開資料)。

[4]2020年度 リメディアル教育企画書、2020年1月21日CEDに提出(非公開資料)

[5]中田亮生・齊尾恭子:アクティブ・ラーニング型新設科目「地域連携ボランティア入門」の充実、2018年6月14日、2018年度教育開発推進センター主催FD+SD研修会開催FD+SD研修会にて発表(本学寝屋川キャンパス)。

2019 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2020 年 6 月 1 日

情報通信工学部 情報工学科

2019 年度主任 竹内 和広

1. 総合的評価の結果について

2019 年度卒業生満足度の総合的評価（項目[C]）は 10 段階の主観評価において平均評価値が 7.0 となる結果となった。これは 2016 年度の平均 7.2 から、2017 年度平均 6.7、2018 年度平均 6.9 と推移する中で、回復傾向にあると考える。その傾向を踏まえて、現行の学科教育の課題と改善方針を卒業生満足度調査の結果に基づいて検討した。

2. 知識・能力の獲得について

質問項目[A]群の「本学での大学生活を通して、あなたは次のような知識や能力などをどの程度獲得したと思いますか」に関する回答は、2017 年度、2018 年度と一貫して平均評価値 3.3 であったが、2019 年度は 3.4 となった。このように、卒業生の本学科での学びに関する評価の傾向はこの数年で大きくは変化していないと言える。

自由記述の回答には、卒業研究に関係する肯定的な記述が目立つ（次節 3. に記述する結果とも整合する）。卒業研究では、指導教員が卒業研究生の研究進捗状況を定期的に報告させつつ適切な助言を与えて議論・検討の機会を設けるほか、中間発表会など本格的な研究発表の訓練の場を複数回設定し、短・中期的なプロジェクト実施を体験する。卒業研究の総決算となる、最終的な学科全体の卒業研究発表会の予稿や口頭発表の準備、卒業論文の執筆に関しても、発表練習・添削指導を何回も綿密に指導する。そのような指導が有効に機能している結果が肯定的な回答につながっていると考える。

他方、質問項目[A]群中の、2017 年度には 3.8 であった、「他人と協調して物事に取り組む力」の質問項目が、2018 年度、2019 年度と同 3.6 に留まっている。また、リーダーシップの知識・能力を獲得したとする自己評価は 3.1 となっており、平均評価値の 3.4 を下回っている点も 2018 年度に引き続いて見られる傾向である。本学の中で最大規模の入学定員を擁する情報工学科では、自律的に協調活動を醸成する土壌があり、教員の目から見るとそのような共同コミュニケーションが自発的に生まれ、それなりにうまく機能してきたように思われる。しかし、近年の協調性・リーダーシップに対する自己評価が低くなる傾向は、学生が、自分たちが行っている自律的な活動が社会一般でも有用であり、リーダーシップの基盤となる、共同コミュニケーションを支える知識・能力であることを十分に自覚していない可能性を示している。2020 年度から始まる新カリキュラムの初年次科目では、友達同士で分からないところを教え合い・議論する学びの形を作る機会を意識的に設けていく予定であるが、その際に学生が自己の社会的活動を客観的にとらえられるように留意していく必要がある。

質問項目[A]群の中で、平均評価値が 3.0 を下回ったのは、2017 年度、2018 年度にひきつづき、「国際的な視野（専門分野）」「国際的な視野（異文化理解）」「国際的な視野（国際交流）」である。このように教養として、国際社会に視野を広げ、興味をもたせていく教育に課題があることを示している。

3. 授業科目群や教育設備・機器などの評価について

質問項目[B]群の「本学での生活を振り返り、以下の授業科目群や教育設備・機器などについて全体的に評価してください」に関する回答は、小計区分 B1～B7、B8～B14、B15～B19 について、それぞれの平均が 2017 年度の(3.5、3.5、3.2)、2018 年度(3.5、3.6、3.3)、2019 年度(3.6、3.6、3.3)と減少した質問項目は存在せず、堅調な上昇傾向にあると判断できる。

それぞれの区分に関して検討を行うと、カリキュラムに関わる回答項目 B1～B7 では、対 2018 年度の調査に対して 2019 年度の調査では、平均評価値が低下した項目として、「B5. 基礎専門科目・専門科目(実験・実習・演習など)」「B6. 卒業研究やゼミにおける指導」がそれぞれ、3.8 が 3.7、4.0 が 3.9 へとわずかであるが低下をしている。これらの項目は B1～B7 の項目群では最高評価を得ている項目であり、高評価の回答者(評価 5 および 4) はそれぞれの有効回答の半数を超えており、傾向としては高評価の満足度を維持している。しかし、自由回答で、これら項目に関する否定的意見を見てみると、「ゼミによって差がありすぎる」「レポートなどの評価についてできるかぎり統一して欲しい」等の指導の多様性に対する不満が記述されている。このような多様性は学科内での担当教員における情報共有によって、教育的に合理的でないものは漸進的に調整・廃止していく予定である。しかし、このような回答から、社会における評価の多様性、複数の評価軸を許容せず、社会における評価軸が単一的で単純なものにとらえている学生の意識も見えて取れる。今後、社会の多様化がより進む中で、多様な評価の必要性を伝えていくことも教育課題である。

質問項目[B]群の中で、最低の平均評価値である 3.1 であったのは、「B3 総合科目(英語科目以外の外国語科目)」および「B19 大学祭等の行事」であり、2018 年度と同じ項目が低評価となっている。B19 項目に関しては、大学祭等のイベントは主体的に学生が作り出す存在であるにも関わらず、消費者として評論家的に批評を加える学生の気質が表出したものであり、今後教育を通じて意識改革を行っていく必要を感じる。

2017 年度までの調査では、事務サービスへの不満が多かった。それらに関する質問項目 B 群(B15～B19)の回答において、2018 年度にひきつづいて対 2017 年度の平均評価比で堅調に向上している。しかし、自由記述回答の中には、依然として情報伝達や事務サービスに対するネガティブな記述がある。2019 年度までは、全学的に導入された統合的な情報連絡・管理システムである OECU MyPage が、事務サービス部門・教員から学生への情報伝達手段の中心として活用されてきた。当該システムの使い勝手の悪さや非柔軟性については、運用側と使い手側との不整合が以前から指摘されており、近年の高度に利便性の増した情報システムに慣れ親しんだ学生には、不満を示す自由記述回答として指摘しやすいものとなっている。しかし、システムそのものの改善も課題であるものの、批評的な言説を安易に信じこんでいる側面もあるように思われる。システムの運用体制の整備および教育が必要であると同時に、自律的な活動の源泉となる共同体におけるコミュニケーションのありかたについての教育が継続的に必要であると考える。

4. 現行の学科教育の課題と改善方針

本学科では 2020 年 4 月から新カリキュラムを実施し、初年次教育の講義形式の授業においては、授業内容を極度に難しくあるいは易しくなり過ぎないように配慮し、成績分布を適度な範囲に収めるとともに、クォータ制による演習科目の設置により学生の学習意欲・成長意欲や達成感を満たすよう、自律的学習習慣を涵養する教育を行っていく予定である。今回の 2019 年度卒業生の満足度調査結果は、新カリキュ

ラムの運用においても、柔軟に取り入れて教育を実施していきたい。また、総合科目(英語科目以外の外国語科目)の改善については、本学学生の国際性に対する視野・価値観にも強く関わる内容であるので、全学的に総合的な改善が必要であると認識している。これについても2020年4月からの新カリキュラムでは「総合ゼミナール」を設置するなど、総合科目を担当する部署と連携した講義実施を予定しており、今後、卒業生の意見も柔軟に取り込みつつ、全学での教育担当者間での連絡・連携を密にし、幅広い学力層に対応する教育施策を検討・実施していきたい。

大学で開催される大学祭等のイベントを、単に自分に供与される娯楽イベントにとらえ、消費者的観点で評価を下す傾向は、大学におけるイベントは在学する学生が主体となって作り上げるという視点が学生側に欠けているように思われる。そのような意識を変化させ、自律的にイベントを企画・運営・協力・参加する意識を持たせることが課題である。新カリキュラムでも、この課題に留意して、実習・実験科目およびキャリア形成支援科目を実施していく予定である。

また、2020年度からは、大学各組織、学科教員、学科学生間の情報伝達の円滑化を目的に、新しい情報共有・伝達システムが稼働・運用を開始する予定である。2019年度までの卒業生の意見を反映させ、有益な共同体コミュニケーションの実践的な教育の題材としても活用していきたい。

以上のような改善方針を漸進的に具現化していくことにより、多様化する社会からのニーズに対して、情報工学科のディプロマポリシーである、情報工学の「基盤的かつ横断的な知識と技術を身に付け、多様な分野において応用展開できる」卒業生を今後も継続的に育成していくことを目指し、卒業生の自己評価を高めることに貢献したい。

2019 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2020 年 6 月 2 日

情報通信工学部 通信工学科

2019 年度主任 村上 恭通

学科の強み(得意なところ)と弱み(苦手なところ)を知るため、2019年度と2018年度の結果から、ベスト3、および、ワースト3の項目(同率3位まで)を抽出した。

[A]本学で獲得した知識・能力

2019 年度の強み:「2 専門的な知識・技能(3.8)」、「11 他人と協調して物事に取り組む力(3.8)」、「5 知識やツールを組み合わせて課題に取り組む力(3.7)」

2018 年度の強み:「11 他人と協調して物事に取り組む力(3.8)」、「2 専門的な知識・技能(3.7)」、「3 物事を論理的に考える力(3.7)」、「7 困難に直面してもそれに対処していく力(3.7)」

2019 年度の弱み:「9 コミュニケーション能力(2.7)」、「8b. 国際的な視野(異文化理解)(2.9)」、「8a. 国際的な視野(専門分野)(3.1)」

2018 年度の弱み:「9 コミュニケーション能力(2.5)」、「8b. 国際的な視野(異文化理解)(2.6)」、「8a. 国際的な視野(専門分野)(2.9)」

以上より、「専門的な知識・技能」と「他人と協調して物事に取り組む力」が育まれたが、「コミュニケーション能力」と「国際的な視野」は獲得できなかったことがわかる。前者はまさに学科教育で力を入れている点であるため、うまくいっていることが確認される結果となった。

一方で、後者は語学が苦手な学生が多い傾向を表しているように感じた。コミュニケーション能力については、社会人スキルとして必須であるため、2018年度入学生からPBLを実験的に導入し、2019年度から本格的に導入して主体性開発に取り組んでいるところである。

細かく見ると、ワースト3であることは変わらないが、2019年度は2018年度よりも0.2~0.3ポイントの改善が見られているので、取り組みは少しは効いていると推測できる。

[B]本学の授業・設備・機器の評価

2019 年度の強み:「6 卒業研究やゼミにおける指導(4.1)」、「4 基礎専門科目・専門科目(講義)(3.7)」、「5 基礎専門科目・専門科目(実験・実習・演習など)(3.7)」、「11 講義室等の環境(空調、照明等)(3.7)」、「13 授業用実験室の設備・機器の充実度(3.7)」

2018 年度の強み:「6 卒業研究やゼミにおける指導(4.1)」、「10 パソコン等のIT機器の充実度・利用しやすさ(3.9)」、「5 基礎専門科目・専門科目(実験・実習・演習など)(3.8)」、「9 図書館の利用のしやすさ(3.8)」、「11 講義室等の環境(空調、照明等)(3.8)」

2019 年度の弱み:「19 大学祭等の行事(3.2)」、「18 留学制度(3.3)」、「3 総合科目(英語科目以外の外国語科目)(3.3)」、「15 シラバスや学生便覧等の諸資料(3.3)」、「16 学務課/四條坂学務課 事務サービス(3.3)」

2018年度の弱み:「3 総合科目(英語科目以外の外国語科目)(3.1)」、「19 大学祭等の行事(3.2)」、「18 留学制度(3.2)」

以上より、「卒業研究やゼミにおける指導」と「基礎専門科目・専門科目」(講義・実験・実習・演習すべて)について満足度が高かったことが窺える。これは実学教育に力を入れている成果が表れていると考えられる。このことは[A]の結果からも裏付けられている。

一方、「英語以外の外国語学科目」、「大学祭等の行事」、「留学制度」などの評価が低く、このことも[A]の語学とコミュニケーション能力が獲得できていない結果にも裏付けられている。

今後は、本学のキーワードである、人間力と技術力を育てるという方針のうち、前者にもより力を入れていく必要があると感じられる。なお、現在、人間力育成については既に取り組み始めているところである。

自由記述欄について:

自由記述欄についても、すべて詳細に読み、内容を分析した。ここでは、逐一、コメントすることは避けるが、「よかった点」、「改善すべき点」、「要望」に記載されていることは、上述の結果を裏付けていることが、具体的な内容で記載されていて、大変参考になる。

「よかった点」では、具体的に講義名をあげて評価してくれているものも多く、非常に励みになる。また、「改善すべき点」や「要望」は丁寧かつ具体的に指摘をしてくれているので、非常にありがたい。

難易度が高いと思う学生と低いと思う学生の意見が混在しているため、学生が二極化していることがアンケートにも表れていた。二極化問題をいかに対策するかは非常に難しい課題である。

また、「上下の交流の機会が少ない」という意見がいくつかあった。ここを改善すると、離学率の改善にも繋がると予想されるので、具体的な対策を検討したいと考えている。

2019 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2020 年 5 月 29 日

金融経済学部 資産運用学科

2019 年度主任 袖山 則宏

2019年度卒業生（2016年入学）については、2018卒業生（2015年入学）に比して卒業生満足度が 0.6ポイント上昇している。

前年度は0.4ポイント上昇していたため、これについては有意な変化と理解し、まずは2018年度の原因の考察を行なう。但し、2018年度の教員の変更の影響は人数の面からも小さく、学生についても多くが3年生までに殆どの授業を受け終わっていること、また、専門ゼミⅡ（4年生ゼミ）は従前の教員が担当したことを考慮すれば、教員構成が与える影響は少なかったと判断できる。

一方で、学生構成は2014年入学から大きく変化してきたが、2014年から志望外入学（まわし）はが始まり、2013年までは一応は金融経済学を意識した学生が入学してきたが、2014年からは金融経済を全く意識していなかった学生が増える傾向が終焉し始めたのである。それゆえ、2014年入学生では約40%が志望外入学生であったことにより、数学などの理系科目は比較的よく出来る学生が増加したが、授業への反応の希薄な学生が増えたという金融を担当する教員もおり、金融経済に興味を持たないまま卒業した学生が増加したことが、卒業生満足度が低下した大きな原因と考え方を整理した。また、2018年度卒業生（2015年入学）は志望外入学の初年度で、教員もその変化に対応できなかつたとも考えられた。

それに対して、2019年度の卒業生の満足度の向上は、なによりも志望外入学者が、さらに前年度よりも低下したことが大きく寄与したと考えられる。学生自体の人数は今後縮小傾向にあるが、各教員と事務局が連携を強めることに努め、残りの年度での学生の多様な興味に対応して満足度を他学部にも劣らないレベルまでに継続させたい。

2019 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2020 年 5 月 12 日

医療福祉工学部 医療福祉工学科

2019 年度主任 藤川 智彦

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け, シラバスについて

教育目標は, カリキュラム・ポリシーの通り, 高度化・多様化する医療技術に対応できる人間力と基礎的知識・技術力について教授研究し, 医療・福祉機器の開発や医療現場において活躍できる総合医療エンジニアと高度技術に対応できる臨床工学技士を育成するために工学と医学の基礎を十分に学習させることにある. 具体的には, 医用工学系について ME1 種および ME 2 種実力検定試験, 医療機器情報コミュニケーター MDIC, 臨床工学技士国家試験に合格させる.

2. 教育改善や授業点検、成績評価(平均値, 成績分布, 合格率など)について

- 1) 専門科目の授業改善プランを提示し, 学習環境改善を図った.
- 2) 1,2 年次に対して計 4 回の統一問題による実力試験をおこない, 成績優秀者を表彰して学生のモチベーション向上を図った. その結果, 基礎工学分野ではのべ 31 名, 医用工学分野ではのべ 21 名, 基礎医学分野ではのべ 97 名の 60%以上得点者を出した. これは, e-learning の学習時間も大きく関連しており, その後の学習過程にも大きく影響するものであると考えている.
- 3) 医科医療事務検定三級の合格者は 1 年次 9 名, 2 年次 11 名であった.
- 4) 第 2 種 ME 技術実力検定試験の合格者は 2 年次 1 名, 3 年次 5 名, 4 年次 1 名の計 7 名であった.
- 5) 医療機器情報コミュニケーター MDIC の合格者は 2 年次 1 名, 3 年次 5 名の計 6 名であった.
- 6) 第 1 種 ME 技術実力検定試験の合格者は 4 年次 2 名の計 2 名であった.
- 7) 臨床工学技士国家試験の合格者は 18 名であった.

3. 学生指導(履修指導や教育相談, 生活相談, 就職指導など)について

例年, 教務委員および臨床実習担当教員, さらに, 卒業研究指導教員またはグループ担任を中心とした履修指導につとめ, 「履修の取りこぼし」防止をおこない, 学生自身が国家試験受験資格に必要な科目の履修状況を確認できるような資料を用いて, 学生自らが学修状態を把握し, それを管理できるように務めている. また, 本学科独自で展開している学生証を用いた来学確認システムにより, 本学の四條畷事務部との密な連携によって, 連続 5 日間の欠席学生を抽出し, 離学に至るプロセスを解析できるデータを収集した. なお, 対象学生はグループ担任による個別の対応だけでなく, 学科独自の学生担当教員を配置し, 早期の学生相談に対応している. 現在, 来学しない学生の把握もできており, 離学者の減少に大きく貢献している. 今後もこのシステムを活用していく予定である. また, 就職指導においても, 卒業研究の指導教員が研究室配属学生の状況を把握し, 学生自身がしっかりとした進路を見つけられるように, 指導教員が積極的に関与し, 学生との密接な関係が構築できるように努めている.

4. 卒業研究指導について

本学科では研究室配属の前に「キャリアデザイン」の科目を設け、卒業研究や技術系社会人として必要な基本的スキルを身につけさせている。これによって、視野を広くさせ、学生自身の将来の選択肢を多くさせる工夫をおこなっている。なお、卒業研究配属に必要な研究室訪問もこの授業内でおこない、訪問学生に対して教員または先輩たちが個別に対応するようにしている。卒業研究は3年生後期における「プレゼミ」による事前指導を経て、4年生前期末の中間報告、後期中期末の概要提出と口頭試験、後期末の論文提出のすべてを満たす必要がある。内容は生体医工学・福祉工学の各関連分野における調査・実験系の研究である。2019年度は学科会議で個々の学生の状況を確認し、学科全体で卒業研究の質の維持に努めた。この結果、本学科所属教員の研究室における卒業研究不合格者は0名であった。なお、これからも学科内で情報を共有し、学生のケアを怠らないよう務めていくつもりである。

5. 卒業・修了生満足度調査結果について

1) 総合評価に関する分析

教務委員および実習担当教員、さらに、卒業研究指導教員またはグループ担任を中心とした履修指導をおこなった結果、個々の学生状況を把握しやすくなり、2019年度の経験した教育の総合評価(10段階)は昨年度の高得点の7.3より、さらに0.1アップの7.4になったと推察できる。

2) 専門分野と獲得した能力に関する分析

例年通り、臨床工学技士の国家資格取得に向けた適切な授業をおこなっているため、専門知識・能力獲得度は従来とほぼ同じ結果を得た。ただし、医療従事者である臨床工学技士の国家資格取得の軸があるため、国際的な視野は低く、リーダーシップに関しても少し課題があると推察できる。しかし、医療従事者としてのリーダーシップは学生の個性を見極めて対応する必要があるため、教育成果として現れるには時間を要すると考えられる。なお、国際的な視野の養成は現状の教育方針に沿った環境構築を引き続き学科内で検討する。

3) 授業科目および卒業研究に関する分析

卒業研究指導教員またはグループ担任からの学生状況を会議等で共通認識することにより、個々の担当者だけでなく、学科教員全体でサポートできる体制を構築しているため、専門教育の実習および卒業研究の満足度評価(5段階)は例年通り極めて高く、4.0と4.4であったと推察できる。ただし、総合科目は3.6前後であるため、今後は総合科目と専門科目のスムーズな連携を考慮したカリキュラムの検討が必要であると考えている。

4) 自由記述に関する分析

自由記述における内容の印象に残っている科目では学科先生の科目が多く記載されており、充実した教育であったことがうかがえた。また、幅広い分野の授業をわかりやすく、丁寧に適切な指導をいただけた、臨床工学技士の役に立ったなど、個々の専任教員の授業における良いコメントや高い評価が多くあった。また、優しい先生が多い、研究室が充実していた、雰囲気がとても良かったなどの記述もあり、卒業研究を通して、各教員が研究室の学生と信頼関係を構築していることも推察できる。

5) 教育設備に関する分析

四條畷キャンパス全体の問題と考えられるが、いわゆるアメニティ施設や通学のバスなどの意見が多く、学生の不満を解消させるハードウェアやシステムの整備が必要であると考えられる。

6. その他, 特記事項(学科独自の教育, アクティブラーニング, 離学者対策など)など

技術者としての必修であるドキュメンテーション能力の基礎を教授するために、1年次で「アカデミック・ライティング」を開講しており、図表の記述、参考文献の提示などの基本的な知識を低学年時から徹底させる試みをおこない、2年次の「電気電子工学実験」により、学生自身で経験した実験の報告書の作成をおこない、さらに、3年次の「キャリアデザイン」の開講により、幅広い分野の知識に得て、4年次の「卒業研究」の中で、プレゼンテーションや卒業論文の作成を可能にするスキルが身につくように、学年の進行に伴い、学生自身でスキルアップができるようにしている。また、3年次の「生体機能代行医用機器学実習」や4年次の「生体機能代行装置学実習」では、学生自身が興味のある部分を中心に事前に調査(グループワーク)し、その結果をプレゼンすることにより、積極性を獲得させるとともに、その結果から学生の知識レベルを外部講師が確認し、実習に役立てている。このような教える側と教わる側に双方にメリットのあるアクティブラーニングを取り入れている。これより、学生自ら興味のある部分に積極的に関わることにより、授業への意欲が飛躍的に向上すると思われる。また、3年次の「ヒト型ロボット創造製作実習」では、板材から部品を金属加工により製作し、学生たちが自ら発案した二足歩行ロボットを製作するなど、実習・演習科目群は学生の自主性を重んじるように心がけている。さらに、学生中心の心電図読図の勉強会を開催し、高学年の学生が低学年の学生に教える指導もおこなっている。これについては、病院において即戦力として機能する能力であると期待される。同時に、先輩・後輩の人間関係を学び、人間形成にも役立っている。また、企業・病院に就職した卒業生が実習補助員として授業に参加し、学生(後輩)に授業内容はもちろん、社会人としての心構えや実体験などを伝え、学生から大変好評を得ている。

7. 添付資料

特になし。

2019 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2020 年 5 月 13 日

医療健康科学部 理学療法学科

2019 年度主任 小柳磨毅

1. 知識や能力の獲得

全体として、4 点前後の高い評価が多かったが、国際的な視野に関する評価が、3 点未満で最も低かった。講義や卒業研究において、国際的な情報収集は行っているが、さらに海外から講師を招聘するなどの、国際交流にも努めていきたい。

学科全体で取り組んでいる点コミュニケーション能力については、昨年に続き、4 点の高得点であったことは評価できる。しかしリーダーシップや協調性、新しい課題発掘などの能力を育む、グループワークを主体としたカリキュラムを充実させる必要がある。

2. 授業科目、教育設備・機器

基礎専門科目、専門科目、卒業研究などの満足度は、いずれも 4 点を上回り高かった。講義や実習、ゼミ活動が適切に実施されていると思われる。図書館については 3 点後半の評価であり、比較的、学生の満足度が高いことがうかがえる。総合科目に対する満足度と、大学の設備に関しては概ね、3 点半ばの評価であり、今後さらに充実させる必要がある

大学祭等の行事に対する評価は、3 点未満であり最も低かった。学校行事として多くの学生が参加するオープンキャンパスも設問項目に加えることを提案したい。また昨年度から始めた、「なわてん」への参加も今後さらに充実させたい。

3. 自由記載

専門基礎および専門科目が、国家試験と臨床実習に役立ったとする記述が多く見られた。知識と技術の教育水準をさらに高めていきたい。

一方、学生の不満としては、バス通学の不便に関する記述が多く見られた。キャンパス全体の問題として、通学バスの利便性向上に努める必要がある。

以上

2019 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2020 年 6 月 1 日

医療健康科学部 健康スポーツ科学科

2019 年度主任 山下 陽一郎

[A] 大学生活をとおして得られた知識や能力に関する質問。

他人と強調して物事に取り組む力(4.0)、コミュニケーション能力(4.0)、的確な判断力(3.9)、困難に直面してもその対処していく力(3.9)は昨年よりも良い値を示し、専門的な知識・技能、的確な判断力(3.8)は昨年度と同様な値を示している。このことから、専門性だけでなく社会的ななかかわりの中で問題解決能力が成長していることを実感している。しかし、国際的な視野(専門分野)、(異文化理解)、(国際交流)の3項目は引き続き2.8~3.1であり、多くのスポーツ選手が国際的に活躍している情報を的確に受け取り、スポーツの世界における国際的な動きを理解すること、およびそこから得られる情報の展開についてのトレーニングが不足している可能性がある。この点に関しては、継続的に日々の講義や実習・実技の中で社会性を高め、国際感覚を研ぎ澄ますような刺激を提供し続けることが求められる。

[B] 授業科目群や教育設備・機器などに関する評価。

卒業研究やゼミにおける指導は高い評価(4.2)を示している。ゼミ活動や卒業研究は大学生活の集大成である。また、教員も専門性を活かした学生への個別指導を行うことのできるため、そのことが学生諸氏に伝わったと思われる。また、教職科目(3.7)については、希望者のみが教職科目を履修しているためこのような高い評価になったと考えられる。学生の高いモチベーションと教員の教職希望者に対する適切な指導が行われた結果であると考えられる。これらに対して、大学祭等の行事(3.2)は、例年学祭自体が寝屋川キャンパス中心であること、運動部所属の学生は秋のリーグ戦の日程と重なることがあることなどを考慮すると、当学科の学生の関与があまりなくこのような評価になっていると思う。間接的に授業に関わる項目として四條畷学務課や四條畷就職課の事務サービスに高い評価を示している。日頃の事務部の対応の丁寧さ、誠実さが評価された結果と考える。

[C] 総合評価

総合評価は10段階で6.9と昨年度同じである。今後はさらに向上させ、学生の満足度を高いレベルに持ち上げていく取り組みをしていきたい。このために、講義科目や実習・実技科目などの教育面の充実を図りつつ、教員各自が学生との密接な関係を構築し学生の要望に応じていけるように工夫することは勿論、教員同士が良好な関係を保ち連携していく努力が必要であると思われる。

自由記述

[A] 知識や能力をどの程度獲得しましたか

- ・運動技術
- ・教員としての指導力
- ・プレゼンテーションスキル

[B] 授業科目群や教育設備・機器などについての全体的な評価
スポーツ学科があるにもかかわらず、トレーニングルームの質が悪すぎる。

[D] 良かったと思う点
教員の専門性に基づくアドバイスや指導などを実感していた。また、部活動やゼミ活動を通じた学生間の出会いを有意義であったとする評価が多く見られた。専門的な学問分野の教授についても丁寧な指導がなされていたことが窺える評価が示されていた。その他、自由度が高く、やりたい分野の勉強や好きな趣味を広げることができた。

[E] 改善すべき点
授業によって難易度に差があること、教員の指導の仕方に個人差があり不足感を感じることを示された。また、学内の情報伝達システムの不備や教職対策の不足に関して改善希望が示された。さらに、コンビニの営業時間、学生食堂のメニューや量の見直し・営業時間の改善などの要望が示された。設備的には、駐輪場の拡張や駐車場の設置に対する要望があった。その他では、立地条件の見直し、交通アクセスの不便さなどがあった。

[F] 役に立った科目名等
生理学、生化学、運動生理学、生体計測学実習、教育法などの講義・実習等、ゼミに加えて、ソフトボール、バスケットボール、器械運動等の実技科目が挙がっていた。

[G] 大学への要望、提案
以下のように要望が示されていた。

- ・ 寝屋川グラウンドを芝に変更して欲しい
- ・ 交通網が不便
- ・ 学生用駐車場の設置
- ・ 学内ルールをしっかりと決めてほしい
- ・ 体育館をもっと利用できるようにしてほしい
- ・ 通学に便利な土地に設置してほしい

2019 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2020 年 6 月 6 日

総合情報学部 デジタルアート・アニメーション学科

2019 年度主任 山路 敦司

今回の卒業生満足度調査についての回答者は 2 名ということと、回答者は卒業延期生であることを考慮すれば、今回の結果については概ね良好ということではないかと判断する。各項目を 2018 年度と比較すれば数値的に微減とみられるが、卒業延期の年度が進行するに従ってその満足度も減少するであろうことについては、納得がいく結果だととらえている。

いずれにしても、2 名の回答データをもとに本学科全体の満足度を判断するのは些か無理があると考えますが、それらを差し引いて鑑みても、この 2 名の卒業にとって満足度のある回答ではないだろうか。とくに [B]8.卒業研究やゼミにおける指導- については 2 名とも最高評価で回答しており、その点においては、卒業に向けて指導教員が熱心に卒研指導に対応したことへの満足度の表れであると考え。その反面、総合科目(外国語)については評価が低く、この点については共通教育機構と情報を共有し、今後改善に取り組む必要があると考える。

2020 年度に向けてもこのように指導教員の手厚い指導ときめ細やかな対応、また学科全体の情報共有を維持しながら、確実に学生を卒業に導くよう、引き続き努めたいと考える。

2019 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2020 年 5 月 28 日
総合情報学部 デジタルゲーム学科
2019 年度主任 上田 和浩

デジタルゲーム学科の 2019 年度の総合評価は 7.2 ポイントで前年度の評価と同じ数値となった。しかしながら、各項目を点検すると、横並び、上昇した数値より、若干数値が落ちた項目の多さが目につくのが気がかりな点である。2020 年度の前期は遠隔授業が主体になっており、より一層細やかな学生指導が必要であると考えます。

- 1) [A]本学での大学生活をとおして、あなたは次のような知識や能力などをどの程度獲得したと思いますか？という質問項目に対して、[A]-5(知識やツールを組み合わせて課題に取り組む力)の項目は 3.7 から 4.0 へとアップしているが、その他の項目に関しては[A]-3(専門的な知識・技能)、[A]-8a(国際的な視野(専門分野))、[A]-9(コミュニケーション能力)は前年度と同じ、その他の項目に関しては若干の数値の低下がみられる。これらの項目の数値の向上に取り組んでいきたい。

また今年度より[A]-6(考えていることを図解などで表現できる力)、[A]-12(新しい課題を発掘する創造力)などの項目も加えられ、それぞれ[A]-6(3.5)、[A]-12(3.5)と集計されている。これらの項目の今後の数値の向上にも合わせて取り組んでいきたい。

- 2) [B] 本学での生活を振り返り、以下の授業科目群や教育設備・機器などについて、全体的に評価してください。という問いに対して、[B]-12(講義室等の映像・教材提示装置等の充実度)、[B]-13(講義室等の映像・教材提示装置等の充実度)に関しては数値の向上がみられ、[B]-2(総合科目(英語科目))、[B]-6(卒業研究やゼミにおける指導)、[B]-18(留学制度)、[B]-19(大学祭等の行事)の項目は前年度並みの数値で後の項目は若干の低下がみられる。これらの項目において、学科で取り組むことができる項目は[B]-4(基礎専門科目・専門科目(講義))、[B]-5(基礎専門科目・専門科目(実験・実習・演習など))、[B]-6(卒業研究やゼミにおける指導)[B]-14(T A による指導)、[B]-15(シラバスや学生便覧等の諸資料)などがあげられ、積極的に取り組んでいきたい。2020 年度の前期は全国的な緊急事態宣言を受け、遠隔での授業形態が主体になっており、学生の満足度の低下につながらないようにより細やかな学生への支援が必要であると考えます。

- 3) 自由記述について、[A](本学での大学生活をとおして、あなたは次のような知識や能力などをどの程度獲得したと思いますか？)に対して、「3DCG クリエイター(ベーシック)や、色彩検定などの資格は取得できました。」と資格取得に対する支援に対する評価があった。また、「異なるやる気の人と同じプロジェクトを進めていく経験」をあげ、学科が取り組むプロジェクト主導の授業、課外活動に対する評価も得た。[B](本学での生活を振り返り、以下の授業科目群や教育設備・機器などについて、全体的に評価してください。)に対しては、「四條畷学舎にも 3D スキャナーを

設置してあげてください」などという声があった。以前は 2 号館の演習室にも 3D プリンターがあった。研究室単位では設置されているところもあるのだが、だれでも自由に使えるという環境ではないということかもしれない。卒研生で寝屋川の 3D 造形施設を利用して作品を作った例もあったので、学生への指導次第かとも思う。その他、[D] (あなたが本学で良かったと思う点を書いてください。) に対しては様々な意見が出された。おおむね好意的な意見が多く、卒研指導の厚さを評価されている。半面、四条畷キャンパスの地理的な不満に関しては例年多いように見受けられた。

2019 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2020 年 5 月 29 日

総合情報学部 情報学科

2019 年度主任 登尾 啓史

【総括】2018 年度と比べ、2019 年度のポイントは格段に向上している。“[A]本学での大学生活をとおして、あなたは次のような知識や能力などをどの程度獲得したと思いますか”の合計は、+0.3 ポイント。“[B]本学での生活を振り返り、以下の授業科目群や教育設備・機器などについて、全体的に評価してください”の合計は、+0.3 ポイント。“[C]あなたが本学で経験した教育について、全体として考えて、総合評価を 1～10 の 10 段階で評価してください”は、+1.1 ポイントも向上している。

この理由は、自由記述にもある通り「教員、TA、学生の距離が非常に近く、楽しく話せて相談できたこと」が原因だと思われる。

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け、シラバスについて教育目標本学科では、以下の教育目標で理工系の情報教育を行っている。・情報通信技術 (ICT) の基盤となる専門知識の獲得・即戦力となり得る実践力の育成・コミュニケーション能力などを中心とした社会性の向上カリキュラム本学科のカリキュラムは、ACM (世界最大のコンピュータサイエンスの学会) が策定した標準カリキュラムに対応している。2005 年のメディアコンピュータシステム学科開設から、上述の教育目標に基づいてカリキュラムを設計し、2009 年度にカリキュラム改定をへて、本年度は、情報学科として更に改善したカリキュラムの実施を開始した。そのカリキュラムでは、特に IT キャリア科目の充実を図っている。JABEE コンピュータサイエンス教育プログラム (略称 CS コース) を設け、外部第三者評価である JABEE (日本技術者教育認定制度) の認定を継続することを目指し、教育の質やサービスの向上に努めている。なお、JABEE 認定を受けないコース (デジタルメディアコース、略称 DM コース) の学生に対しても、各科目における合格基準は同一にしている。2017 年度に JABEE の認定継続のための受審を受け、継続して認定することが認められた。シラバス本学科の専門科目のシラバスにおいては、「授業目標」「授業スケジュール」「合格基準」「評価項目」を必ず明示するようにしている。

2. 教育改善や授業点検、成績評価 (平均値、成績分布、合格率など) について JABEE の認定を目指すべく、各教員が統一された方針で授業の質を高めることを心がけてきた。2009 年度から学科内に FD 担当教員を定め、FD 会議を開き、内容の点検を行っている。2013 年 4 月から本学科の「コンピュータサイエンス教育プログラム」が「情報および情報関連分野」の JABEE 適合プログラムとして継続認定された。そこで受けた改善勧告に対する対応を行い、さらなる教育改善を加えた 2017 年度からのカリキュラムを前年度策定した。新カリキュラムの点検は次年度に行う。成績評価 JABEE 基準により、成績の相対評価は行うことはできず、シラバスに明示した合格基準と評価項目に基づき絶対評価を行っている。その結果として、高年次の科目によっては合格率が低いものもあるが、近年の努力のおかげで学科の平均としては、科目合格率は高まりつつある。引き続き、合格率の数値目標を定め合格率を改善している。

3. 学生指導（履修指導や教育相談、生活相談、就職指導など）について、履修指導年度末や年度初めに設けられた学科オリエンテーションの時間以外に、1年生向けには「スタディスキル」、2年生向けには「プレゼミ」の中で、学科の教育の方針やJABEEや履修のポイントについて説明を行っている。教育相談・生活相談グループ担任の方法にはこれまでに試行錯誤があったが、2009年度からは、新生を8グループに分けて、1グループにつき主担任1名、副担任1名の教員が担当している（担任は2年ごとの持ち回り）。入学式直後の新生オリエンテーションでは、2009年度からアイスブレイキングを導入している。また、5月18、19日に、例年通り学外研修を実施し、その中で学生全員とグループ担任との個人面談をしたり、学生同士や学生と教員が打ち解けるようなイベントをしたりした。1年次の必修科目である「スタディスキル」においては、欠席が多い学生に対しては、担任から本人や家庭へ電話連絡するようにしている。就職指導情報学科では1年生向けにキャリア形成科目の役割を持っている「スタディスキル」を実施した。旧カリキュラムの2年生向けには科目「プレゼミ」の中で4回、キャリア形成のための授業を実施した。3年生向けに学科独自の進路ガイダンスを2回開催した。初回は4年生で内定を既に得た学生の経験談、2回目はこれからの就活についての説明に重点を置いている。また、後期科目「キャリアプランニング」の中で筆記試験対策、模擬試験を行っている。3年生の1月からは、研究室単位で就職課を訪問し就職課担当者と懇親を深めグループで就職活動を行うシステムに変更した。就職課へ行っていない学生を捕捉するとともに面談を行い就職課へ行き就職活動を行うように指導している。

4. 卒業研究指導について本学科では、3年次で「卒業研究」を行っている。2年次の7月に配属の研究室を決定し、2年次の後期にプレゼミを行い、3年次の年度初めから卒業研究を開始し、3年次の年度末に終了する。卒業研究の合格を4年次への進級条件にしている。また、3年次の月～金曜日の3、4時限に卒業研究を割り当てており、原則としてこの時限に他の科目を受講することはできない。上述のような制度によって、学生に十分な時間をかけて能動的な学習を行わせ、問題解決能力、プログラミング能力、プレゼンテーション能力などを修得させる。これを3年次の年度末までに終えることによって、身に付けた能力を就職活動に役立てることも狙っている。学科の方針として、研究テーマは一人ずつ異なり、複数人で1テーマは認めていない。合格の基準として、学習・教育目標の達成に加えて、450時間以上の従事、中間報告（口頭発表）2回、20ページ以上の論文、最終発表（口頭発表）、1000行以上のプログラム（CSコースのみ）を定めている。論文と最終発表は複数の教員で評価を行い、合否を判定する。最終発表会では、各研究室から選抜された学生による優秀研究セッションを設けている。これらの学生は全教員で評価し、最優秀研究を選定する。上位の学生は、当該年度の学業優秀賞に推薦している。なお、研究をさらに続けたい学生や大学院進学予定者のために、4年次配当の選択科目として「特別研究」を設けている。

5. 卒業・修了生満足度調査結果について数値による評価については、ほぼ昨年度と同程度である。また、不満の多くはバスに関することであり学科としては対策を取ることはできない。自由記述の良かった点に関する記述からも、3年次の卒業研究、グループディスカッション、テクニカルプレゼンテーションなど就職活動に直結する科目は全体的には好意的な評価が得られている。今後もより多くの学生からより良い評価が得られるよう努力していきたい。

6. その他、特記事項（学科独自の教育、アクティブ・ラーニング、離学者対策など）など学科独自の教育学科開設の2005年度から毎年新入生に学科指定のノートPCを購入させている。このノートPCには、学科の授業に必要な各種のソフトウェアがあらかじめインストールされている。このPCを活用して、プログラミング能力やコンピュータ運用能力を向上させることを狙っている。また、後述のe-Learningを利用して、一般の授業にも役立っている。MC2の協力を得て、ウェブベースのe-LearningのMoodleを学科として積極的に活用している。例年約70のコースが設けられており、一般の授業以外に、研究室単位のプレゼミや卒業研究の運用にも利用されている。「ACM国際大学対抗プログラミングコンテスト」に出場する有志学生の課外活動を学科として支援している。アクティブ・ラーニング必修科目として卒業研究、コンピュータシステム演習を行っているのに加え、特別研究やグループプログラミング演習、エンジニアリングデザイン演習など、選択科目にもアクティブ・ラーニングを行う科目がある。これらの科目は、卒業生満足度調査でも良かった科目として挙げられており、学生に有意義に受け入れられていると判断できる。離学者対策離学者対策の一環として、今年度より事務と連携し休みがちな学生には本人及び保護者に直ぐに連絡し、保護者が面談を希望した場合直ちにそれに応じるようにした。その結果、2017年度、2018年度は離学率が4%台、2019年度は数名離学者が増えて5%少々となった。昨今、科目合格率の上昇より離学が少しずつ防止されてきたようである。

7. 添付資料

1. 資料1 情報学科ウェブページ <http://www.cs-oecu.jp/>
2. 資料2 JABEE プログラムへの取り組み状況 <http://cs-oecu.jp/misc/oecu-t-fd>

2019 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2020 年 5 月 29 日

人間科学教育研究センター

2019 年度主任 中里見 博

1. 総合科目への尺度評価部分について

総合科目の満足度についての大学全体の値を見ると、①外国語以外は 3.5(2018 年度 3.5、2017 年度 3.5)、②外国語科目(英語以外)は、3.3(同 3.3、3.2)となっており、ここ数年間、ほぼ横ばい状態である。基礎専門科目・専門科目(講義)の満足度が 3.8、同(実験・実習・演習など)が 3.9 となっていることに比べると、今年度も総合科目の評価はやや低く、外国語科目(英語以外)はさらに低く目であった。また人間科学教育研究センターが多くの科目を担当する教職科目については、3.5(同 3.5、3.5)で、これも横ばいであった。

昨年の報告書でも指摘したことであるが、毎年行なわれる学生の授業アンケートでの総合科目に対する総合評価では、近年多くの学部学科の総合評価平均を上回る結果が出ていることを考えると、卒業時点での総合科目に対する満足度が基礎専門科目・専門科目よりも低い傾向にある要因として、総合科目の履修が 1・2 回生に集中しているため、その印象や評価が、卒業生満足度調査の実施時点では薄れてしまっているという問題も関係しているように思われる。

しかし、卒業生満足度調査において、総合科目に対する評価が低調であるという事実は真摯に受け止める必要がある。そこで、人間科学教育研究センターでは、センターの使命の基本に立ち返り、その役割を一層強化することによって、学生の満足度を高める努力を継続することにしたい。そもそも、総合科目の使命は、学生に幅広い教養を身につけさせ、社会人としての基礎能力を育てることと並び、大学における学びの基礎学力を養成することにある。とくに、後者の大学における学びの基礎学力を養成に力を入れ、学生の学習状況やニーズ、学科からの要請に等に応えられるよう、以下のような取り組みを行なっている。

① 新カリにおける「日本語上達法」関連の科目の充実・強化

従来から、寝屋川キャンパスの新入生を対象とした国語プレイスメントテストの成績下位者へのリメディアル教育としての日本語上達法クラスを実施しているが、2020 年度からスタートした新カリにおいて新たな、学生の汎用的な日本語活用能力を向上させるため、「日本語上達法1」のクラス数を倍増させ、各学科当たり1クラス開講し、できるだけ多くの学生が受講できるようにした。さらに、「日本語上達法2」を、より高度なアカデミックレベルに対応する日本語活用能力を身につけるクラスと位置づけ直した。

② 課外学習支援活動の実施

2018 年度後期から、大学での学び方として「読み方」「書き方」「聞き方」、「ノートテイキング法」を指導する課外学習支援活動、「講義マスターへの道」を実施している。専門分野において必要とされる基礎的な執筆ルールの徹底、読み書きなどの一般的なスキル習得を指導することが大学全体で求められているため、その定着・向上を促すために授業外の時間で行なう自由参加型の少人数ミニ講座である。2018 年度は寝屋川キャンパスのみだったが、2019 年度からは、寝屋川と四條畷の両キャンパスで実施した。

2020 年度は、新たな取り組みとして、レポートライティングの個別指導を行なう予定にしている。

③ 学科との学習支援の連携強化

共通教育機構 3 センターと各学科が連携を強め、学生の学習支援を強化することによって、離学者を減ら

し、学生の満足度を高める取り組みを 2018 年度から行なっている。

具体的には、第 1 に、共通教育機構の 3 センターに各学科との連絡窓口となる教員を置き、主に1回生・2回生を対象とした学習状況等を共有し、学生への指導・支援にあたっている。第 2 に、人間科学教育研究センターでは、4 年次生で総合科目の単位が不足している学生をリストアップし、そのような学生が授業を受けている場合で、学習状況がよくない学生について、学科指導教員に連絡することを 2019 年度から開始した。

以上述べてきた対策は、すぐに目に見えて数字に表れる結果を出せるような対策とは言えないかもしれない。しかし、人間科学教育研究センターとしては、つねにセンターの使命の基本に立ち返り、その使命をよりよく果たせる努力を継続することが、学生の満足度を上げることにつながると考え、地道に取り組みたい。

2. 自由記述について

「あなたにとってとくに役に立った。あるいは印象に残っている科目名と、どういう教育内容が役に立ったか」という項目から、総合科目についての記述をピックアップする。

- ・ 「日本語上達法」がレポートの書き方に役立った、就活に役立った、など
- ・ (英語以外の)外国語クラス(中国語が多かったがドイツ語、フランス語も)が楽しかった、教養が身についた、など
- ・ 経済学の世界、歴史学の世界の高評価(複数)
- ・ スポーツ実習は、体を動かすよい機会せてよかった、たくさんの人とコミュニケーションがとれたなど

やはり卒業時点での調査であるため、卒業研究や専門科目への印象が強く記述も多い中、いくつか総合科目への積極的な記述が散見された。3,4 年次で履修した可能性あるが、低学年で履修し長く印象に残ったものもあったと思われるため特筆した。

以上

2019 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2020 年 5 月 27 日

共通教育機構 英語教育研究センター

2019 年度主任 杉村 寛子

● 2019 年度卒業生満足度調査の結果および考察

当センターに関わる総合科目（英語科目）に関して、5 段階評価は寝屋川および四條畷両キャンパスとも前年度と変わらない 3.5 ポイントであった。2015 年度から開始のカリキュラムに対して一定の評価を得たものと理解している。また自由記述においては、寝屋川では 21 件、四條畷では 7 件の英語に関する言及があった。内容としては「おもしろかった」「楽しかった」という具体性に欠ける（何がどうおもしろいのかの記述がない）表現が比較的多く、改善の端緒を得にくい意見であった。さらに高評価の背後に単位取得が易しいという観点も見られた。これらは本学の英語教育の「質」について熟考した上での記述とは考えにくい。一方「説明の明瞭」「(学生に向き合う態度としての) 丁寧さ」など教授方法や教員の教室における姿勢を評価する意見、また英語学習の基礎や学び方の体得、知識の習得、(4 技能のうち) 特定の技能を伸ばす学習方法の確立という感想は、今後英語教員が一層研鑽を積もうとする士気を高めていくものである。

大学全体としてのニーズはこの結果からだけでは無論計り知ることができないが、コミュニケーション系科目における「英語による英語の授業」実践に対する評価や、授業外で学内において英語に触れる機会を設けてほしいなどの意見は、主としてリスニングやスピーキング力の涵養を（少なくとも）一部の学生が希求していることを示しており、すでにプログラムとして動いている、外国人講師による EIGOP の今後の運用も含め、このような学生の期待に応える場について検討していく時期に差し掛かっているのかもしれない。また 2019 年度より開始した日本人専任教員による「イングリッシュ・カフェ」を一層機能させ、授業外での英語学習の支援に当たっていききたい。

● 2020 年度以降の英語教育の展望と満足度向上

2020 年度より開始となったカリキュラムでは、ここ数年の卒業生による本学における英語教育の評価も考慮しつつ、同時に 2015 年度開始のカリキュラムにおいては基礎力の定着を図るためにリーディングに特化した科目をより多く設置していたが、その点を見直し、1 年次より 4 技能を涵養する機会を取り入れた科目編成を行なった。これにより、従前とは異なり、アウトプット系の活動も授業に組み込むことができるようになったため、4 年後の調査の結果に期待をかけた。

英語に対して苦手意識の強い者ならびに英語力を伸ばそうとする者、これら本学に入学してくる両極にある者に対して、それぞれの目標に従って英語学習への動機付けを行ない、種々の習熟度に応えられるだけの教員の教育力を高めていく必要も感じる。そのための情報共有の場を設け、年に 1 度非常勤講師を含め、授業実践発表を行なっている。今後このような学内における研鑽の機会を充実させることで、共通教科書を使用する科目では、担当者が知恵と経験を持ち寄り、より学生の実際に即した教育方法を模索し、実践することができよう。ひいては、それが卒業する者の満足につながっていくと考える。

最後に、英語教育に期待されていることが専ら技能を高めることと思われがちであるが、調査項目「8 国際的な視野」にある「8b 国際的な視野（異文化理解）」（寝屋川では 2.8 と低めであり、前年度から横ばい状態であり、四條畷では 2.7 と昨年比-0.1 である）の涵養も今後英語教育において積極的に関与していくべき領域であろう。英語という外国語を学ぶこと自体が異文化理解につながる。日本語とはまったく体系の異なる言語を学び、それを背景に社会・歴史・文化を見つめ、違いを知ることで、日本の外にある世界まで視野が広がり、興味関心が高まっていく。今後は使用する教科書や教材の内容が国際的な視野の広がりの一助となるように工夫していければと考えている。

2019 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2020 年 5 月 29 日

共通教育機構 数理科学教育研究センター

2019 年度主任 原田 融

1. 設問[A]について

AS センターが主に関係する項目は 1～4 であると思われる。基礎専門科目として、数学と物理学の講義・演習と実験では重点を置いて教育している項目である。大学全体では「1 幅広い分野にわたる教養」(2018 年・2019 年度ともに平均 3.7)と「4 的確な判断力」(2018 年度・2019 年度ともに平均 3.6)については昨年度比で変わらずであったが、「2 専門的な知識・技能」(2018 年度 3.8→2019 年度 3.9)、「3 物事を論理的に考える力」(2018 年度 3.7→2019 年度 3.8)については 0.1 ポイント上昇している。「2 専門的な知識・技能」と「3 物事を論理的に考える力」が上昇した背景には、AS センターが力を入れている数学・物理科目の基礎学力向上の取り組みの成果が表れているものと考えられる。

下記の表に学部ごとの伸びをまとめた。工学部と総合情報学は 0.1 ポイント上昇した項目がみられる。一方、情報通信工学部と医療福祉工学部では 0.2 ポイント上昇している項目が目立つ。このことは AS センターが進めている習熟度別の授業が成果を挙げていることに関連しているかも知れない。この成果をより合理的に検証し維持できるように、学科と連携しながら、シラバスや授業内容での改善や工夫を重ねてゆく必要があるだろう。

学部ごとのポイントの伸び【2019 年度(2018 年度)△変化】

	工学部	情報通信工学部	医療福祉工学部	総合情報学部
1 幅広い分野にわたる教養	3.8(3.7)△+0.1	3.6(3.6)△0	3.9(3.8)△+0.1	3.7(3.6)△+0.1
2 専門的な知識・技術	3.8(3.8)△0	3.9(3.7)△+0.2	4.0(3.8)△+0.2	3.9(3.9)△0
3 物事を論理的に考える力	3.8(3.7)△+0.1	3.7(3.6)△+0.1	3.8(3.8)△0	3.8(3.7)△+0.1
4 的確な判断力	3.6(3.6)△0	3.4(3.4)△0	3.8(3.7)△+0.1	3.6(3.5)△+0.1

2. 設問[B]について

AS センターが関係する項目は 4 と 5 であり、大学全体では「4 基礎専門科目・専門科目(講義)」3.8、「5 基礎専門科目・専門科目(実験・実習・演習など)」3.9 と昨年度と同水準を維持している。[B]の平均が 3.6 であることから、良い評価を得ていると言える。下記の表に学部ごとの伸びをまとめた。「4 基礎専門科目・専門科目(講義)」では 0.1 ポイントの伸びがみられるが、「5 基礎専門科目・専門科目(実験・実習・演習など)」では 0.1 ポイント減がみられる。これの原因については、上記で述べたように、より学科と連携しながら授業内容の合理的な改善や工夫に努めたい。

学部ごとのポイントの伸び【2019 年度(2018 年度)△変化】

	工学部	情報通信工学部	医療福祉工学部	総合情報学部
4 基礎専門科目・専門科目(講義)	3.8(3.8)△0	3.7(3.6)△+0.1	3.9(3.8)△+0.1	3.8(3.8)△0
5 基礎専門科目・専門科目(実験・実習・演習など)	3.9(3.9)△0	3.7(3.8) △-0.1	3.9(3.9)△0	3.8(3.9)△-0.1

3. 自由記述について

AS センターに直接的に関係する内容は限られているが、授業に関する具体的な意見が出されており、授業改善への指針として貴重なものであるといえる。

(1) 数学科目に関する意見として、「微積分の授業が難しすぎた(P)」、「微分方程式が難しかった(F)」といった意見が寄せられた。しかしながら「難しかった」という意見が【E】「あなたが本学で改善すべきと思う点を書いてください」の項目だけではなく、【F】「あなたにとって役に立った。あるいは印象に残っている科目名と、どういう教育内容が役に立ちましたか」の回答欄にもあることから、「難しかった」ことが不満ではなく、学びにつながっていることがうかがえる。「微分・積分：クラス別での講義だったので、自分に合ったレベルで分かりやすかった(F)」とストレートに習熟度別クラス編成を評価する声も聴かれた。これらの意見より、習熟度別クラスが効果的に機能しているという側面もあると判断できる。「線形代数：この科目で学んだことが他の科目でも出てくるから(P)」、「線形代数：計算能力が身に付いた(P)」、「基礎微積分1・演習：演習の時間の雰囲気良かった(U)」という意見も寄せられている。

(2) 物理科目に関する意見として、「物理学1・演習：力や重力による原理を知ることができる(U)」、「力学1・演習：授業が分かりやすかった(H)」といったポジティブな意見がみられた。また、「物理：中間テスト受けられなかった時があるが、受けさせてくれた(U)」などのように、学生に合わせて柔軟に対応している教員の姿勢が評価されている。

(3) 特に AS の科目へ寄せられた意見ではないが、「専門科目が全体的に分かりづらい。1回生と2回生との難易度の差が大きすぎてついていけなくなる人もいるのではないかと思います。」という意見が寄せられた。これは、高校から大学の専門科目への橋渡しを担う AS として注視すべき意見であろう。その他、AS の物理学・実験も含めて、本学の実験教育に関わる教職員や実験設備を高く評価する意見が多かったことは特筆すべきである。また、習熟度別クラス編成について、「授業でクラス分けしていて、授業内容がバラバラなのに成績の付け方が同じなのは改善すべきだと思います(H)」という意見が寄せられた。習熟度別クラス間での不公平は生じていないことを、学生に対してより一層、丁寧に説明する必要があるであろう。

4. まとめ

AS センターでは専任教員・非常勤教員のほとんどは、1~2 年次生の授業を数多く担当しており、今までに培ってきた授業の工夫やノウハウは蓄積され、これを共有してきている。共通教育機構では、さらに授業のねらいや目的を明確にし、学生へのオリエンテーションの充実を図りながら、習熟度別クラスの編成、アドバンス科目の設置、専門科目との連携を強化して、全学的な基礎教育の充実を目指している。また多く非常勤講師を含めて数学・物理の科目毎にそれぞれ責任者(まとめ役)の専任教員を配置しており、時折発生する学生からの注文や意見に対しても迅速に対処できる体制を整えており、迅速な対応に努めている。AS センターでは、入学時のプレイスメントテストを実施して、習熟度別クラスによる授業運営を推し進めてきた。複数学科を合わせてクラス分けすることは、単に習熟度別授業を実現するためだけではない効果もある。「もっとコミュニケーションを取れるようにしたほうがいい」といった声が幾つもあり、学科単独のクラスと、複数学科によるクラスとでは授業中の雰囲気も異なるようである。共通教育機構としての役割を果たせるよう、習熟度別クラス間の調整、科目間の調整、基礎専門科目と専門科目の連携などがさらに必要であろう。また「まわりがうるさい」など授業中の環境についての不満、評価方法に関する意見に留意しなければならない。

大学院

2019 年度
「修了生満足度調査結果の検討」

2019 年度修了生満足度調査結果検討報告書

2020 年 5 月 29 日

大学院工学研究科先端理工学専攻
2019 年度専攻主任 湯口 宣明

先端理工学専攻において、2019年度は9名が博士前期あるいは後期課程を修了した全員から修了生満足度調査の回答を得た。10段階による総合評価の平均は6.3であり、母数が小さいことを考慮する必要があるが、前年度の8.1に比べると低下した。

「本学での大学院生活をとおして、あなたは次のような知識や能力などをどの程度獲得したと思いますか。」の設問に対し、獲得度の平均が高かった項目は「専門的な知識・技能」、「物事を論理的に考える力」、「困難に直面してもそれを対処していく力」(前年度よりも向上)であった。これらの傾向をみるとしっかりと基礎を身につけようとする学生の姿勢が伺えた。先端理工学専攻では、「理工学分野の基盤となる基礎科学力を習得し、それぞれの専門分野において柔軟な発想をもって適応できる応用力を身につけている」ことを博士前期課程における学位授与方針(ディプロマ・ポリシー)のひとつとしており、それぞれの分野における専門的な知識や技能を身につけて本課程を修了したと捉える学生が多かったと考えられる。また学会などの学外活動が良い経験となったという声も多くあり、これらの活動は継続して実施していくことが望まれる。一方、「国際的な視野(専門分野)」、「国際的な視野(異文化理解)」、「国際的な視野(国際交流)」は、いずれも獲得度の平均が前年度から続いて低い(それぞれ、2.6, 2.2, 2.3)。先端理工学専攻では、英語科目を選択必修としており、また、国際共同研究を活発に行っている研究室もいくつかあるが、それらが国際的な視野の育成に繋がっていない現状が読み取れる。より動機づけをするためにも海外での国際会議や海外研究機関との共同研究に院生に参画してもらうなど機会をより取り入れる検討が望まれる。

「本学での大学院教育を振り返り、以下の授業科目群や設備・器機などについて全体的に評価して下さい。」の設問に対し、評価の平均が高かったのは「研究やゼミにおける指導」であった(5段階評価で4.1)。また「大学院履修要覧等の諸資料」については評価が上がった。一方「教務課・学生課／四條畷学務課 事務サービス」における評価の平均が低かった。教員と事務部門との連携をしてほしいとの声がいくつか聞かれた。現在学生に対応するポータルシステムなどにより効率化が進められており解決に近づくことが期待される。また「研究用実験室の設備・機器の充実度」が大きく低下した。大学院を魅力的にするためにも設備の充実も急務と考えられる。

2019 年度修了生満足度調査結果検討報告書

2020 年 5 月 29 日

大学院工学研究科電子通信工学専攻
2019 年度 専攻主任 富岡 明宏

2019 年度卒業生は 8 名となり、前年度の 5 名から人数が増加、回復しつつある。今回のアンケート調査はバラつきと不確定さが少なくなって、より信頼性のあるデータとして分析する必要がある。まず[A]の達成度の自己評価は、全体的に前年度より一様に向上している傾向が見られる。大学院生の積極性を引出し、それを「ほめて伸ばす」専攻の方針が所望の効果を生んだと考えている。電子通信工学専攻での教育は成功を修めていると言ってよい。特に勉学面での達成度を尋ねた[A]1~4 の項目(幅広い分野の教養、専門的知識・技能、論理的に考える力、的確な判断力)については、これまでの年度と比べて評価5をつける学生数が年を追うごとに増加しており、高い自己達成感を抱いていることがうかがえる。大学院進学の意味が学生に浸透し、かつその意義の実現に成功している、という評価であろう。専攻としては、[A]、[B]に見られるこの高い教育効果を今後も維持するとともに、学部生に大学院進学を一層勧め、進学率を高める努力を継続したい。この効果が実って進学者数は漸増を続けており、2020 年度の M1 は 10 名まで増加している。7 困難に対処する力、9 コミュニケーション力、10 リーダシップについても比較的高い自己評価となっている。比較的评价が低かったのが「5 自ら課題を発見する力」と「8 国際性」である。ただ後者については、大学院ゼミナールなどでの誘導も実り、過年度と比べると大きく向上していることも事実である。社会的に要請の高い「国際性の獲得」も、遅まきながら向上の途上といえよう。

他方では自由記述のコメントの大部分が、「国内・国外での学会発表の経験」、「学会活動」が自己向上に大きく役立った、という記載であることから、学会発表や大学院ゼミナールでの発表に積極的に取り組んだ学生は、電子通信工学専攻での学びが明確に自己向上に寄与し、国際性が身についているとの判断につながったと考えられる。だが、学会発表を奨励する研究室とそれほど積極的でない研究室で大きな差異を生んでいることが懸念され、今後大学からの経済的な旅費等の補助も学会発表の大きな動機づけになると期待できよう。また、学会発表を計画することが、期限を設け、それを達成できる適切な研究計画を学生自身が立てることに寄与し、社会に出た後も計画性のある行動を取れる人材に成長する大きな要因となりうるだろう。

この問題に対する対策として、(1)大学院ゼミナールでの発表題目やアブストラクトなどに英語を併記する、(2)担当教員が他大学との協力や外国施設を研究に利用する、などの努力を続けている。この取り組みをさらに推し進め、専攻担当教員全員で共有し、講義の中で英文資料に触れる機会を増やすなど、一層の「国際性」涵養に努めたい。この方策を支持する意見が、自由記述の学生コメントにも記載されていることは特筆に値する。

大学院教育の質の高さは[B]の各項目にも表れている。ただ勉学に熱心に取り組む大学院は、大学施設に対する期待もかなり高いようで、大学施設やサポート体制の一層の充実を求める声が[B]のいずれの項目にも現れている。

※ 添付資料：資料1 学生アンケート(非公開資料)

2019 年度修了生満足度調査結果検討報告書

2020 年 5月 29日
大学院工学研究科制御機械工学専攻
2019 年度専攻主任 井岡 誠司

概ね、昨年度と同程度のよい評価を得られていると思われます。項目ごとに見ると、「国際的な視野(異文化理解)」、「国際的な視野(国際交流)」の項目の評価があまりよくなく、国際交流では評価2が最も多いという結果でした。国際的な視野の獲得のために、専攻では「国際工学技術特論」「テクニカルコミュニケーション」の講義を開講しており、「国際的な視野(専門分野)」の項目が異文化理解や国際交流の項目より少し高めの評価を得ることができていると思われます。異文化理解、国際交流の評価を上げていくために、国際会議で研究発表をする機会を増やすなど海外の研究者、学生、留学生と交流をもつと拡大する方策を検討する必要があると考えます。

自由記述で改善すべき点として副指導教員を挙げている意見がありました。専攻では指導教員のほかに各院生に対して副指導教員を1名つけるようにしています。この副指導教員をより有効に活用できるシステムの構築を検討する必要があると考えます。また、機械工学科からの進学者が少ない、という意見があり機械工学科所属の教員としては、学部生に進学を勧め、進学者数を増やすようより一層の努力をしていきたいと考えます。大学院でよかった点として、学外での研究活動や共同研究を挙げている意見がいくつかあり、院生の満足度を上げるためにも、学外との交流を拡げていくことは重要であると考えます。

2019 年度修了生満足度調査結果検討報告書

2020 年 5 月 31 日

大学院工学研究科情報工学専攻

2019 年度専攻主任 小森 政嗣

満足度調査結果の総合評価については、昨年度に引き続き高い値を示していた(2015 年度:7.4, 2016 年度:7.5, 2017 年度:7.4, 2018 年度:10.0, 2019 年度:). しかし、修了生は 3 名でありサンプルサイズが小さいため、総合評価の経年変化について何かしらの客観的な結論を導くことは難しい。個々の項目においても総じてリッカート尺度による評価が上限の「5」である回答が占める割合が高く、平均値に基づいて項目間の相対的な比較を行うことも難しい。ここでは最も良い評価の「5」以外の回答を行った回答者数が相対的に多かった項目について検討を行っていく。

「幅広い分野にわたる教養」および「自ら課題を見つけそれに取り組む力」は大学院情報工学専攻のディプロマポリシーにおいて育成することが謳われていた能力の中でも重要なものの一つである「複雑な科学・技術問題を分析し解決する能力」と関連した項目であると言えるだろう。一般に、「情報工学」の分野は、他の工学分野と比較しても、より幅広い分野に関する横断的な知識や教養が求められ、また新たな価値を創造することが求められる分野である。これらの項目において 2 名が「4」と評価していた。情報工学と社会との関わりを学生に意識させ、学生に幅広い分野を主体的に学ぶことを促していく必要があると考えられる。

次に、「コミュニケーション能力」の項目ですべての修了生が「4:ある程度獲得した」の評価にとどまっていたこと、および「リーダーシップ」、「他人と協調して主体的に物事に取り組む力」の項目で「3:どちらともいえない」と回答した修了生が 1 名いた事について取り上げる。この結果は、例年と比較すると低い評価であると言える。例年と異なり、2019 年度修了生 3 名のうち 2 名は日本語を母語としない学生であった。日本語を母語としない話者の多さと、コミュニケーション能力に関連する項目の 2019 年度修了生の相対的に低い評価が関連している可能性が考えられる。日本語でのコミュニケーションの困難さが、講義科目、演習科目、研究指導の質にどのように影響したのか、またどのように教育を行うことで、日本語を母語としない学生のコミュニケーション能力、およびリーダーシップ、他人と協調して主体的に物事に取り組む力を高められるかについて、具体的な事例をもとに検討し、今後の日本語を母語としない学生の教育に反映させていく必要があるだろう。

「TA 制度」に関する項目も高く評価されていた。TA を行うことで学部 下級生との交流機会が生まれ、より多くの交流が双方にとって有益になったと思われる。今後も より一層下級生との交流機会を増やすことが大学全体を活性化させると考えられる。

自由記述欄では、履修登録システムに対する不満が寄せられた。旧 OECU MyPage のシステムに関する不満であり、履修登録において現行の MyPortal が導入された 2020 年度以降についてはこれらの問題が改善されていると考えている。

2019 年度修了生満足度調査結果検討報告書

2020 年 5 月 27 日

大学院 総合情報学研究科 デジタルアート・アニメーション学専攻

2019 年度専攻主任 寺山直哉

今回 2019 年度の調査結果では、知識や能力の獲得に関する質問[A]群の合計は 4.2(直近過去の 2017 年度は 4.0)、大学院教育や設備・機器に関する質問[B]群の合計は 4.3(直近過去の 2017 年度は 4.0)となっており、一定の成果が見て取れる。また、教育の全体を考慮した総合評価[C]は 8.5(直近過去の 2017 年度は 8.3)とこれも全体として上昇評価を得流ことができた。特に項目[B]では「4 研究やゼミにおける指導」や「9 研究用実験室の設備・機器の充実度」などでの満足度が 5 と高い評価を得ることができており、主査や副査に加え、適宜それ以外の専門性の高い教員による指導や助言を丁寧に行ってきたことによる成果や、各学年における積極的な学外研究発表やコラボレーションなどが要因になっていると考えられると共に、学内や研究室の設備・機器環境の更新にも鋭意努力してきた結果だと思われる。

また、例年評価が低下しがちな質問[A]群の「8 国際的な視野」の項目だが、今回の2019年度では「8a. 国際的な視野(専門分野)」と「8b.国際的な視野(異文化理解)」において、各5.0と4.5(直近過去の2017年度は各4.0と3.8)と、大きく向上している。これらは、中国やオランダなど学部時代からの積極的な留学生や研究生の受け入れと、彼らの研究内容や成果発表の機会を日本人学生と共有することなどに注力してきた成果であるとも言える。

一方、同項目の「8c.国際的な視野(国際交流)」では、評価が3.5(直近過去の2017年度は各3.6)と低下するに至っている。これは、専門分野や異文化理解としての情報共有には一定の評価を得たのに対し、留学生と日本人学生間での相互コミュニケーション自体においては、未だ改善の余地が多分にあるということを示唆していると考ええる。今後の対策としては、一つのプロジェクトにおける共同制作や共同研究など更なる工夫の必要があると考える。

自由記述においては、「E あなたが本学の大学院で改善すべきと思う点をお書きください」の項目において、「履修がPCなどデジタルベースではなく、アナログだった事」という内容が目を引き、学部では当たり前のように対応していることが、大学院ではある種軽視されていることに対する不満の記述があった。こうした教育環境における情報化や効率化については、当然ながら大学としても重要な事項であり、MyPortalを主としたシステム集約も改善されてきているので、今後も更なる学生サービスの向上が大切である。

2019 年度修了生満足度調査結果検討報告書

2020 年 6 月 1 日

大学院総合情報学研究科 MW 専攻
2019 年度専攻主任 門林 理恵子

今回の調査結果では、知識や能力の獲得に関する質問[A]は 4.0、大学院教育や設備・機器に関する質問[B]は 4.2、教育の全体を考慮した総合評価[C]は 8.0 と高い評価を得られた。個別に見れば、項目[A]の「自ら課題を見つけそれに取り組む力」「困難に直面してもそれに対処していく力」は 4.4、「幅広い分野にわたる教養」「国際的な視野(専門分野)」「他人と強調して主体的に物事に取り組む力」は 4.1 であり、大学院修士課程で修得すべき能力の獲得が着実にできていると考えられる。

一方、項目[A]の「リーダーシップ」はそれぞれ 3.4 と低めであったが、これは修了生の多くが留学生であり日本語の能力の獲得が十分ではなく、日本人学生との交流や日本人学生を含むグループワーク等でのリーダーシップの発揮が困難であったためと推測される。教員および国際交流センターは日頃からきめ細かな支援を行っているが、各自が日本語の習得により積極的に取り組むよう指導の強化を行っていききたい。

2019 年度修了生満足度調査結果検討報告書

2020 年 5 月 29 日

大学院総合情報学研究科コンピュータサイエンス専攻

2019 年度専攻主任 升谷 保博

本専攻の総合評価の平均値は、2017→2018→2019 年度で 8.0→8.0→8.3 と変化しており、比較的高い値を維持できている。2019 年度の分布は 1 人以外 7～10 であるが、4 と回答した学生がいることが気付きである。

設問[A]「本学での大学院生活をとおして、あなたは次のような知識や能力などをどの程度獲得したと思いますか?」については、全項目の平均値は、2017→2018→2019 年度で 3.7→3.7→3.5 と推移しており、低下が見られる。特に変化の大きいのは、「1 幅広い分野にわたる教養」(4.2→3.4, 0.8 下落)と「10 リーダーシップ」(4.0→3.2, 0.8 下落)である。前者に関しては、特定分野に取り組んでいるという意識が強いのかも知れない。自由記述の設問では、他の専攻の授業の受講や他大学との交流についての回答もあり、機会の設定が望まれる。一方、後者に関しては、研究室の運営や TA 業務などを通じて身に付いていると思われるが、自己評価として低いのは残念である。また、「8a 国際的な視野(専門分野)」「8b 国際的な視野(異文化理解)」「8c 国際的な視野(国際交流)」のいずれの値も他の項目に比べると明らかに低いことは残念であり、本専攻の今後の教育の課題の一つである。

設問[B]「本学での大学院教育を振り返り、以下の授業科目群や設備・機器などについて全体的に評価してください。」については、全項目の平均値は、2017→2018→2019 年度で 3.5→4.1→4.0 と推移している。特に変化の大きいのは「8 講義室等の映像・教材提示装置等の充実度」(4.3→3.5, 0.8 下落)と「10 TA 制度(担当者の立場から)」(3.8→4.5, 0.7 上昇)である。前者は、自由記述でも要望があり、その対応が望まれる。一方、後者は、2018 年度に大きく評価を下げた項目であるが、2017 年度の水準に戻った。2018 年度の評価が改善に反映されたと信じたい。

自由記述の設問については、肯定的な内容も多かったが、否定的な内容で特に具体的なものとして以下のような内容があった。

- 映像機器が不十分(HDMI 未対応など)
- 履修登録・確認は紙ではなくウェブでできるように
- 修士論文の概要の様式に無理がある
- 設備を遅い時間まで使えるように

大学に長く在籍した修了生の声にはしっかりと耳を傾ける必要がある。

以上

2019 年度修了生満足度調査結果検討報告書

2020 年6月5日

大学院 医療福祉工学研究科 医療福祉工学専攻

2019 年度専攻主任 田中 則子

設問[A]本学での大学院生活を通して獲得した知識や能力においては、平均 3.7 という結果であり、平均以上を維持できていた。各項目を見ると、昨年度に比してわずかに低下している項目が多い中、昨年度改善を目標とした「リーダーシップ」や「他人と協調して主体的に物事に取り組む力」は、わずかながらポイントアップしていた。一方、国際的な視野については 2.7~3.0 であり、海外論文やその他の国際情報に触れる機会を工夫して、学生の国際的な視野拡大にむけてさらに検討していきたい。

設問[B]本学での大学院教育（授業科目群、設備・機器など）においては、すべての項目で 3.8 以上、総評は 4.1 であった。昨年度 3.5 未満であった図書館・講義室の機器の充実度は 3.9~4.0 で 0.6~0.7 ポイント上昇していた。今後もハード面、ソフト面ともに高い満足度を維持できるようにしたい。

[A] [B]の結果を踏まえ、設問 [C]本学での大学院教育に対する総合評価は、8.8 ポイントであった。昨年度にはわずかに及ばなかったものの（昨年度は一昨年度に比して 1.0 ポイント上昇）、高評価が維持できている。自由記載欄においても好意見が多く、オリエンテーションや学部生指導も含めて、今後とも 9 割近い満足度を確保できるように、さらなる大学院教育の充実に取り組んでいきたい。

■参考

当報告書と合わせ下記の資料が参考となることを、添えておきます。

『教育基本3方針（ポリシー）』

<http://www.osakac.ac.jp/about/policy/>

2020年6月
教育開発推進センター
寝屋川キャンパスF号館2F
〒572-8530 寝屋川市初町18-8・内線：3129
ced-office@osakac.ac.jp